

父の死きっかけに

校に頼まれたから洗っている、というわけではない。像を洗うのは、自分の意思で、だ。

「きっかけは、父親の死でした。

青年像の前に現れたのは業者ではなく、ひとりの年輩者だった。乗ってきた車のトランクには、まるで清掃会社かと思わせるような長いホース、洗剤やバケツなどが見える。学

父親が亡くなってから、何事にも感謝するようになったんです」

毎年、年の暮れにこの青年像を洗

いにやってくる。

「洗い始めたのは、ほんの4年前。

まだ新人ですよ」

長谷正治さん。60歳。中央大学を

昭和40年に卒業。現在、中央大学学

員会足立支部長と陸上部OB会幹事

長を兼ねている。6年前まで中央大

学で陸上部・短距離走のコーチもしていた。

「私は陸上部でしたからね。40

0メートル走の選手をしていますが、室内リレーで日本記録を作ったこと

もあるんです」

ふと少年のような表情になった。

「青年像」磨くひとあり

“自分”を磨く長谷正治さん

正門の坂をすこし上ると、総合政策学部の11号館。その手前に、2体の像が立っている。青年像だ。神田駿河台時代からのシンボル像である。昨年暮れの、冬晴れの日……。像を清掃する人の姿があった。

(学生記者 金辺久義)

高3のときモデルに

青年像のモデル——長谷さんご本人がじつはそうなのである。

「中大付属高校3年のときかなあ。陸上部で走っているところを、この

像のモデルにスカウトされたんですよ」

モデルになったときのことをたず

ねた。これ、裸ですよね。

「裸ですよ。もちろん私も裸にな

りました」

サポーターはつけていましたけど、と付け加えて、笑った。

青年像を制作したのは、本郷新氏。

立命館大学にある、戦没学徒の「わ

だつみの像」、広島の「母子像」な

どを手がけた、著名な彫刻家である。

そのベテラン彫刻家を唸らせたことが一つあるという。

「普通、プロのモデルでもポーズをとるのは疲れるから、20分に10分

程度の休憩を取るのですが、私の場合、1時間で10分程度の休憩しか取



らなかったんです。だから逆に、先生のほうが疲れたと、音を上げていました」

それでもすべて終わるまで、20日間ほどかかったという。像の台座には、「長谷君、ありがとう 本郷新」という感謝の言葉が彫られていた。

1人2役——友愛と未来

互いに寄り添い、指差す天を一心に見つめている2体の像。もう一人のモデルは誰なのか。

「実は、モデルは私1人だけなんです。1人2役だったんですよ。顔だけ変えて、体は一緒。向かって右側が、私が学生のときの顔です」。

お礼の言葉が台座にあるのは、このこともあったからであろう。長谷



43年前の「自己像」を洗う長谷正治さん

さんが制作にかかわったともいえる青年像の除幕式は、モデルをしてから約1年後のことだった。

「初めて完成品を見たときは、さすがに感動しました。自分が立っているようなものですから」
もつとも、と笑う。

「本郷先生が、実際の私の脚よりも、像の脚を長めに作ってくださいましたよ。像を見て惚れ惚れしていましたよ」

2体のポーズにも、きちんとした意味があるらしい。

「向かって右側の像は、左の像に手を回しています。あれは、友達どうし仲よくしていこうという友愛。そして、向かって左側の像は指を天に向けていますね。これは、未来に向かって明るく突き進んでゆこう、という意味。いずれも、若者に向けたメッセージです」

ご本人自らのメッセージのようにも聞こえた。

それまで楽しそうに話していた長

谷さんも、いざ青年像を洗い始めると、その表情は真剣だ。

手伝いの人とふたりで、遠くの水道口からホースを引き、像の全体にクレンザーをかけ、たわしでこする。かなりな労働である。

「落書きをされていることもあるんですよ。最近はなくなりましたがね」

作業が終わった。磨きあげられた像が、凜と冴えわたる冬空にくっきりと映える。台座には「若人は語り合い、そして歩むのが好きだ」と刻まれている。

スポーツで鍛えた体、肌をつや。いまもぞんぶんにお若い。

「まだ週に4日、ジムに通っていますよ。腹筋がタテに割れた体型とはずいぶん違ってきたけどね」
と笑いながら。それが貫禄、というものである。

いや、分らない。ジャージを脱いで、やおらハダカになられたら、
案外……。